

移民法の施行(一九二四年)以降の日米関係の悪化や、日本国内のナショナリズムの高まりの影響により、在米日系社会の状況は変化していった。そうしたなかで日系仏教は、アメリカ市民である日系二世仏教徒を、日米の「架け橋」となる存在として重視するようになっていった。

日米間の戦争中、日系仏教は敵国日本との関係を疑われたため、宗教者たちは強制収容所に送り込まれ、寺院の活動も停止させられた。大戦後、活動を再開した日系仏教は、日系二世が中心となってアメリカ化を進めていき、戦前のように「ホームランド」とのつながりを前面に打ち出さなくなっていく。かくして、大戦後の日系仏教は、日系アメリカ人のエスニック・チャーチとして存続していった。ただし、大戦後の世代交代の影響は大きく、若い世代が増加していくにつれて信仰継承の困難に直面している。だがその一方で、三世以降の一部には、エスニック文化である仏教に関心を持つ者も生まれている。

本発表の事例を見ても、実体としての「ホームランド」についての直接的な記憶があった日系一世、第二次世界大戦以前に一世たちから故国について詳しく教えられて育ち、日本への旅行や留学などで滞日経験を持つ者も多かった二世、大戦後に「アメリカ人」として成長した三世以降の世代では、それぞれが抱く「ノスタルジア」は異なっている。それゆえ、移民とその子孫たちの「ホームランド」への「ノスタルジア」を通じた宗教への関わりには、世代間で大きな差異があることは看過できない問題である。

日本人妻が出会った故郷

——台湾の日本語教会と高齢者施設にて——

藤野 陽平

戦前戦後の混乱から、本人の意思に関わらずその後も国外で暮らすこととなった日本人は少なくない。台湾にはそうした流れで今も日本人妻達が暮らしているが、現在キリスト教系の団体が彼女たちのケアを行っている。本発表では台湾において日本をとりまく環境を確認し、彼女たちにとって故郷である「日本」とは何であり、それにキリスト教がどのように影響しているのかについて考察した上で、移民と宗教研究の議論に位置づける。

事例として玉蘭荘という日本語で運営されるキリスト教系のデイケアセンターと、台湾基督長老教会の国際日本語教会という日本語教会に集う日本人と台湾人を対象とする。前者は日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)の医療宣教師が日本人妻へのケアを兼ねて、日本語の「聖書と祈りの会」を始め、これを前身として、日本語によるキリスト教を基礎としたデイケアセンターとして発展し、現在に至っている。後者は台湾に暮らす日本人や、日本統治期に日本教育を受け日本語リテラシーの高い「日本語族」と呼ばれる台湾人が、日本語で礼拝することを目的に設立された教会である。

こうした日本語を提供する場に集う日本人妻は来台の経緯によつて三つに分類することができる。第一に戦前に台湾へ移住し台湾人と結婚しそのまま定住した場合、第二に戦前に日本で台湾人と結婚し戦後移住した場合、第三は戦前に夫婦で満州等

大陸に移住したが夫を亡くすなどし、中国人と再婚して国共内戦のため台湾へ移住した場合である。

本発表の前提として台湾社会における日本そのものや日本語のもつ意味はどのようなものだろうか。戦後の台湾社会では省籍矛盾と呼ばれる日本統治期から台湾に暮らす本省人（台湾語を重視し、台湾独立を望む）と戦後中国から移住した外省人（北京語を重視し、台湾は中国の一部分と考える）、との間におけるコンフリクトが存在し、台湾の長老教会は明確に本省人のための教派で台湾語重視、台湾独立という姿勢をとっている。そうした教派にとっては日本語を重視し親日的な態度をとることは、反中の態度を明示することを意味している。こうした戦後台湾の文脈で「日本」という場を求める一定数の台湾人が存在する。そうした彼らの「日本語欲求」を満たす場の一つに国際日語教会や玉蘭荘がなっているのである。台湾人参加者には日本統治期に日本語のみで暮らし、戦後、北京語、台湾語、英語を学んだため、母語というものがいない人や、台湾語の方が礼拝にふさわしい言語だと感じ日本語教会に参加するという人等、多様な背景を持つ人々が集まっている。

日本人妻にとつての日本とキリスト教に関しては、それまでの過酷な生活のため宗教的癒しの必要性があり、また高齢者である彼女たちにとっては死や健康の問題が深刻であり、キリスト教がその欲求を満たすようなスピリチュアル・ケアを行っている。

以上の議論をふまえると本発表の事例は単にエスニック・チャーチという風には理解できない。そこには日本人と台湾人の

「日本語族」という複数の民族集団が結合することで、場が形成されている。寺田喜朗は台湾における日系新宗教を疑似的エスニック・チャーチとして分析した（『旧植民地における日系新宗教の受容——台湾生長の家のモノグラフ』ハーベスト社、二〇〇九）が、本発表の事例においては台湾人参加者についてあてはまるのであつて、日本人妻にはあてはまらない。彼女たちにとつて日本語の集まりは、「ノスタルジア（引き裂かれた過去への郷愁）」としての故郷「日本」を提供してくれる場であつて、エスニック・チャーチそのものである。それでいて日本人妻だけで場が成立しているのではない。このことから、台湾の日本語教会はエスニック・チャーチと疑似的エスニック・チャーチの複合的エスニック・チャーチとして位置づけることができるだろう。

在日ムスリムの少女たちのエスニシティと複数の故郷

川崎のぞみ

本発表の目的は、日本においてムスリムであることが所与の環境に生まれた第二世代の女性の信仰が、家族、社会環境、父方母国との繋がりの中でどのように形成されてきたかを考察することである。在日ムスリムに関する研究は、主に外国人労働者や改宗した日本人女性の適応についてなされたものであり、第二世代の詳細な研究はまだ非常に少ない。

ここで取り上げるのは、北関東に在住する二十代前半の女性の語りである。バブル期に来日したパキスタン人労働者と改宗日本人女性の間に生まれた子どもという在日ムスリムの一つの